

## 当世噺家気質

### 柳家さん喬と「ちきり伊勢屋」

「ちきり伊勢屋」は、柳派代々の腕利きが演じてきた人情噺の大作である。二代目、三代目、四代目の小さんをはじめ、二代目談洲楼燕枝らが手がけた。落語・講談速記の専門雑誌「百花園」には、二代目禽語楼小さんの速記が10回連続で掲載されている。

由緒正しき大物だから、寄席や落語会のトリネタとして演者にも観客にも親しまれるのは当然だろう。ところが、現実には「ちきり伊勢屋」の演者は少なく、我々観客が高座で出くわす機会は滅多にない。

「ちきり伊勢屋」が”幻の大ネタ”になったのには、訳がある。

第一に、噺が長い。長すぎるのである。速記雑誌に10回連載が必要なくらいだから、まともに高座にかければ2時間でも収まらない。

内容的にも、「主人公が自分の葬式を自分で仕立て上げ、棺の中から本番を見ている」などという趣向の面白さはあるが、全体的に見れば、淡々と物語が進むだけで盛り上がり欠ける一。「ちきり伊勢屋」はまことに厄介な大作なのだ。

昭和の戦後は、六代目三遊亭円生や八代目林家正蔵（のちの彦六）が、時たま独演会で演じた。さらに、埋もれた落語や珍品を多く手がけた二代目橋家文蔵が「2時間ぶっ通しで『ちきり伊勢屋』を演じる会」を開いて話題になった。その文蔵が「『ちきり伊勢屋』をやらないか？」と後進の若手にやたらに声をかけた。その中に柳家さん喬もいたのだという。

「でも全部は教わっていないんです。いいとこだけの抜き読み。それからしばらく経って『ちきり伊勢屋』を通しでやりませんか、とお声がかかったんです」

何を隠そう、声をかけたのは当会、TBS落語研究会のプロデューサーだ。

「今の（三代目）文蔵さんから先代の通しの台本を借りて全体を頭に入れた後、自分の工夫を加えて練り直しました。長い噺をダレずに聴いてもらうには、ドラマチックな要素が必要です。登場人物それぞれの物語を膨らませて・・・なんてやってたら、長い噺がさらに長くなっちゃった。結局、2006年12月の第462回から3回連続で高座にかけました。全部合わせると2時間をかなりオーバーしましたね」

さん喬はネタを練り上げる時、あえて台本を作らない。大まかな筋を把握したら、ひたすら稽古を繰り返す。そのうち登場人物が勝手に動き出すのだという。

「そこまできたら大丈夫。演者の私は、登場人物を追いながら『ああ、そっちへ行くのか。それならこういう筋立てに』と物語を整理していけばいいんです」

さん喬流の自在な落語作り。噺の完成後に大きく内容が変わることもしばしばだ。

「『ちきり伊勢屋』も、最初は全体をドラマチックにと思っていたのに、何度か演じているうちに、主人公の鶴次郎と、彼が命を助けた娘とのラブストーリーになりました。『死を宣告され、運命に弄ばれる鶴次郎が人を恋するのはなぜ?』と考えながら、演者の私は2人の行末を追いかけていくだけです」

今回は連続ではなく、一夜限りの長講である。我ら観客は、また新しい「ちきり伊勢屋」に出会うことになるかもしれない。

☆ 長 井 好 弘(演芸評論家)

1955年8月10日、東京・江東区深川新大橋生まれ

元読売新聞編集委員。都民寄席実行委員長。

浅草芸能大賞専門審査員。

『僕らは寄席で「お言葉」を見つけた』

『新宿末広亭のネタ帳』

『寄席おもしろ帖』

ほか著書・編書多数。

TBSテレビ主催 第五次「落語研究会」プログラムに

2003年3月から「当世噺家気質」を執筆中